

青年期において完全主義と自己愛が抑うつに及ぼす影響

福井 義一

はじめに

抑うつは、不安と並んで精神的不健康の最も代表的な要素の一つである。抑うつを予測する要因としては、パーソナリティ特性や認知的スキーマ、養育環境や愛着など様々なものが想定されてきた。その中でも完全主義と自己愛は、いずれも精神的健康や抑うつとの関連が深く、後述するようにこれまで様々な角度から検討されてきた。

完全主義については、心理学における定義は研究者によって様ではないものの、一般的には“過度に完全を求めること”という意味合いで用いられており、パーソナリティ特性や認知的スキーマであると目されている。また、向けられる対象の違いによって自己志向的・他者志向的・社会規定的完全主義の3つの側面があり (Hewitt & Flett, 1990, 1991b), そのうち自己志向的完全主義が精神的健康と密接に関連することが報告されてきた。ただし、その関係はやや複雑で、最初は抑うつの促進因子として、後に多次元測定が行われるようになると、その一部は抑制因子として機能することが示唆されてきた。

例えば、単次元としての自己志向的完全主義については、Hewitt & Flett (1991a) が抑うつと正の相関を報告したのに対して、桜井・大谷 (1997) は抑うつや絶望感と負の相関を示すことを報告した。加えて、桜井・大谷 (1997) は多次元自己志向的完全主義尺度 (Multidimensional Self-oriented Perfectionism Scale: 以下 MSPS) を用いて詳しく検討した結果、4つの下位尺度のうち完全性欲求は抑うつと無相関、失敗懸念と行動疑念は正の、高目標設置は負の相関をそれぞれ示すことが分かった。その後、同様の結果を示す報告が相次いだ (例、大谷・明田, 1999; 伊藤・上里, 2002; 小堀・丹野, 2002)。しかし、山下・福井 (2011) は、完全主義と抑うつとの関係を先延ばし傾向が媒介することを想定し、完全主義の適応的な側面 (高目標設置) は先延ばしを促進、不適応的な側面

(ミスへのとらわれ) は抑制、先延ばし自体は抑うつを促進するという間接パスの存在を見出した。さらに、福井 (2009) は、高目標設置の機能について、愛着の内的作業モデルを調整変数とした検討を行い、高目標設置が単独で抑うつを抑制する訳ではなく、高目標設置が高く適応的な群と、同じく高目標設置が高いにもかかわらず不適応的な群が共存することを示し、その背後に愛着スタイルの影響が存在することを実証した。このように、完全主義と抑うつの間には、何らかの媒介変数や調整変数が入ることで説明力の高いモデルを構築できる可能性があると思われる。

ところで、完全主義の各下位側面が心理的健康や適応に及ぼす影響についての研究結果が一致していない理由について、Shafraan, Cooper, & Fairburn (2002) は、完全主義の概念整理が不十分のままに多次元測定がなされていることを指摘した。さらに、福井・山下 (2012) は、わが国における完全主義尺度を用いた研究を概観し、完全主義尺度の下位概念の測定における信頼性と妥当性について疑念を抱き、完全主義の既存の複数の尺度項目を混ぜて因子分析を行い、「完全性と理想の追求」と「不完全性と失敗への恐れ」という2つの下位概念に再編した。その上で、福井・山下 (2012) は両者と抑うつとの関連を検討し、単純相関においては「不完全性と失敗への恐れ」と抑うつとの間に中程度の有意な正の相関を見出したが、「完全性と理想の追求」とは無相関であったことを報告した。それに対して、互いに他の影響を統制し合った重回帰分析の結果からは、抑うつに対して「完全性と理想の追求」が負の、「不完全性と失敗への恐れ」が正の有意な影響をそれぞれ示すことを立証した。これによって、完全主義は2つの要素に大別され、抑うつに対して促進と抑制という正反対の効果を持つことが実証されたと言える。この新しい完全主義尺度で測定されているのは、Hamachek (1978) による正常な完全主義と神経症的な完全主義の分類や、Enns & Cox (2002) による不適応的 (神経症的) な完全主義と適応的 (正常) な完全主義の区別と近いと言える (福井・山下, 2012)。

本研究では、下位側面が徒に多くなるのを避けるため、完全主義の適応的な側面と不適応的な側面に集約して測定が可能な本尺度を用いることにした。

自己愛は、文字通りには「自分を愛している」という意味であるが、自己像がまとまりと安定性を保ち、肯定的情緒で彩られるように維持する機能 (Stolorow, 1975) と定義されている。DSM-IV-TR (American Psychiatric Association, 2000) によると、健康的自己愛から過度の誇大性や賞賛欲求、共感性の欠知等を呈する自己愛性パーソナリティ障害までのスペクトラム構造を示すと考えられている。自己愛が精神的健康に及ぼす影響については、従来から多くの研究が行われてきた。

例えば、小西・山田・佐藤 (2008) は、自己愛傾向低群の方が高群に比して抑うつ得点が高いことを報告した。同じく、小西・山田・佐藤 (2008) では、自己愛人格傾向という素因を持つ者がストレスを多く体験したときに、男性では抑うつや自律神経系の活動性亢進が生じるのに対して、女性では身体的疲労感といったストレス反応を示すことが見出された。また、自己愛の下位側面について見ると、「注目・賞賛願望」は、抑うつと重複成分を持つと思われる孤独感との間に正の、「統率・指導性」や「優越感・有能感」は負の相関を示すことが分かった (中村, 2005)。

以上のように、完全主義も自己愛もいずれも抑うつや孤独感といった精神的健康の一側面と関連が深いことが分かっているが、完全主義と自己愛の関連について直接的に検討した研究は少ない。Watson, Varnell, & Morris (1999) は、両者の関連について自我心理学の観点から実証的に検討した結果、自己・他者志向の完全主義が自己愛傾向の各下位尺度と有意な低い正の相関を示したのに対して、社会規定的完全主義とは無相関であったことを報告した。また、Trumpeter, Watson, & O'Leary (2006) も、自己志向の完全主義と自己愛傾向の間に正の相関を認めている。また清水・岡村 (2010) は、完全主義の適応的な側面であると想定される高目標設置と自己愛傾向の間に低い正の相関を見出した。ただし、これらの研究では、両尺度の下位側面同士の関連が検討されていないという問題がある。

Blatt (1995) は、神経症的 (不適応的) な完全主義の特徴として、失敗回避への動機づけが強すぎて、一般的には高いと思われる達成にも満足できず、自己への是認と受容を求める側面があるという。そうした傾向は自己愛の中でも「注目・賞賛欲求」を高めること

になると思われる。さらに、真の成功や達成にたどり着けず、自身のパフォーマンスの質を低く判断したり (Frost & Henderson, 1991)、満足な自己実現ができなくなったり (Flett, Hewitt, Blankenstein, & Mosher, 1991) することから「優越感・有能感」を下げるかもしれない。

清水・岡村 (2012) は、自己愛性人格障害傾向の精緻な概念化を図る際に、自己愛傾向と対人恐怖心性の二次元からなるマトリックスの中で、どちらも低い「誇大-過敏型特性両質型」の象限からどちらも高い「誇大-過敏型特性両向型」の象限に至る軸が、完全主義の多寡と共変動することを示し、後者の特徴の一つに完全主義や強迫性の強さを位置づけた。後者は臨床的には過敏型自己愛 (Gabbard, 1994) と森田神経質を持つ対人恐怖 (森田, 1953)、平均的対人恐怖症 (鍋田, 2007) や強迫型・自己愛型の対人恐怖 (西岡, 1999) との関連が想定されている。ただし、清水・岡村 (2012) は自己愛を単一次元で測定しており、最終的な分析には完全主義も「高目標設置」と「ミスへのとらわれ」の合成得点を用いている。そのため、本研究では両尺度の下位尺度を用いて、その関連についても詳しく検討する。

また、自己愛と完全主義の組み合わせが自己愛性人格障害や対人・社会恐怖と関連することが示唆されているが、両下位側面がどのように互いに関連し合っているか、抑うつに影響を及ぼすかについての検討は見当たらない。そのため、これについても探索的に検討する。

目 的

本研究の目的は、いずれも抑うつとの深い関連が予測される完全主義と自己愛が、どのように交絡しながら抑うつに影響を及ぼしているのかについて検討することであった。適応的な完全主義は、自己愛の健康的な側面を高めるであろうが、不適応的な完全主義はその逆に自己愛の不健康的な側面と関連しているだろう。また、適応的な完全主義は抑うつとの間に負の、不適応的な完全主義は正の関連をそれぞれ示すだろう。さらに、健康な自己愛は抑うつとの間に負の、不健康な自己愛は正の関連をそれぞれ示すだろう。それに加えて、完全主義と自己愛のどちらが抑うつへの影響の主要因であり、どちらが媒介要因であるかについても両モデルを比較することで検討を行った。さらに、完全主義と自己愛の各下位側面の多寡の組み合わせによって抑うつへの影響が異なるかについても探索的に検討

した。

を尋ねた。

方 法

結 果

調査協力者：大学生237名（男性89名，女性148名）の協力を得た。平均年齢は，20.23歳（SD=1.87）であった。

手続き：心理学系の講義時間内に，文書で同意を得た上で，質問票調査を留置法により行った。なお，本調査は当該大学のコース・クレジット制度を利用して行われた。

尺度構成：

完全主義 自己志向的完全主義を測定するために，Burns (1980) を元に作成された辻 (1992) の完全主義尺度の項目群と，Frost, Marten, Lahart, & Rosenblate (1990) を元に作成された桜井・大谷 (1997) の新完全主義尺度の項目群を併せて再編成された完全主義尺度（福井・山下，2012）を用いて，「完全性と理想の追求」と「不完全性と失敗への恐れ」の2つの下位尺度得点を得た。

自己愛 わが国において自己愛を測定する尺度はRaskin & Hall (1979) やRaskin & Terry (1988) を元に邦訳版がいくつか作成されている（例，大石・福田・篠置，1987；宮下・上地，1985；佐方，1986；小西・小川・橋本，2006）が，本研究では本邦で最も使用頻度が高く，信頼性と妥当性が確認されていると思われる自己愛人格目録短縮版（小塩，1998）を用いた。「注目・賞賛欲求」，「優越感・有能感」，「自己主張性」の3つの下位尺度得点を得た。

抑うつ 抑うつ傾向を測定するために，Carroll, Feinberg, Smouse, Rawson, & Greden (1981) を元に作成された日本語版キャロル抑うつ自己評価尺度（島・鹿野・北村・浅井，1985）を用いた。

フェイス項目として，年齢と性別，所属学部・学科

完全主義尺度の因子分析の結果，福井・山下 (2012) において確認されたものと全く同じ単純構造が得られた。性別による各尺度得点の違いを検討するために *t* 検定を行った。その結果，完全主義の下位尺度得点である「完全性と理想の追求」に1%水準で有意な性差が見られ，男性の方が高かった ($t=2.278, p<.01$)。また，自己愛の「注目・賞賛欲求」については有意傾向が見られ，こちらも男性の方が高かった ($t=1.908, p<.10$)。それ以外の尺度得点には有意な性差は見られなかった。

次に，各尺度得点の相関分析を行った結果を Table 1 に示した。なお，一部の尺度得点に有意な性差が見られたため，性別を統制した偏相関分析も行ったが，結果に大差はなかったため掲載しなかった。完全主義の「完全性と理想の追求」は自己愛の各下位尺度と有意な正の相関を示したが，抑うつとは無相関であった。それに対して，「不完全性と失敗への恐れ」は自己愛の「注目・賞賛欲求」とは有意な正の，「優越感・有能感」や「自己主張性」とは負の相関を示した。また，抑うつとは有意な正の相関を示した。自己愛の各下位尺度のうち，「注目・賞賛欲求」以外は抑うつと有意な負の相関を示した。

また，抑うつを従属変数とした階層的重回帰分析の結果，「完全性と理想の追求」 ($\beta=-.247 \rightarrow -.194$) は抑うつに対して負の有意な，「不完全性と失敗への恐れ」は正の有意な影響を示し，この効果は自己愛の各下位尺度を投入した後も保存されていた ($\beta=.580 \rightarrow .490$)。自己愛については，「注目・賞賛欲求」が正の有意な，「優越感・有能感」は負の有意な影響をそれぞれ示したのに対して，「自己主張性」は有意な影響

Table 1 相関分析結果

	不完全性と 失敗への恐れ	注目賞賛欲求	優越感有能感	自己主張性	抑うつ
完全主義					
完全性と理想の追求	.524***	.388***	.308***	.297***	.065
不完全性と失敗への恐れ		.239***	-.199**	-.147*	.443***
自己愛					
注目賞賛欲求			.302***	.264***	.103
優越感有能感				.426***	-.271***
自己主張性					-.152*

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

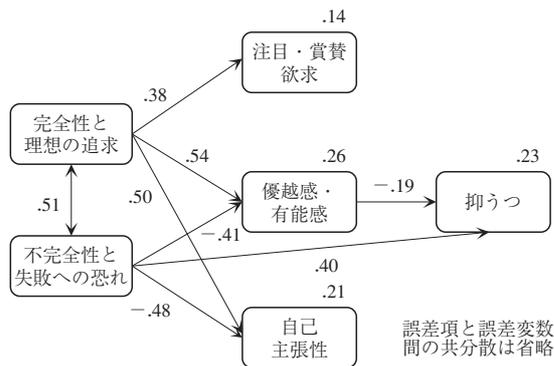


Figure 1 完全主義が自己愛を介して抑うつに及ぼす影響

を示さなかった。さらに、完全主義の各下位尺度を投入すると、「注目・賞賛欲求」の効果は消失した ($\beta = .215 \rightarrow .102$) が、「優越感・有能感」の効果は保存された ($\beta = -.320 \rightarrow -.171$)。「自己主張性」はいずれの場合も、無関係のままであった。上の文中の括弧内の矢印は互いに他の下位尺度得点を投入する前後で標準偏回帰係数の値が変化したことを示している。

続いて、完全主義が自己愛を介して抑うつに及ぼす影響について、共分散構造分析を行った結果を Figure 1 に示した。モデルの適合度は、 $GFI = .990$, $AGFI = .949$, $CFI = .991$, $RMSEA = .056$, $AIC = 41.15$ と良好であり、自己愛が完全主義を介して抑うつに影響を及ぼすというモデルの適合度 ($GFI = .941$, $AGFI = .939$, $CFI = .989$, $RMSEA = .069$, $AIC = 42.55$) を上回った。Figure 1 から分かるように、完全主義から自己愛へのパスはほぼ全て有意であったが、抑うつに対しては完全主義の「不完全性と失敗への恐れ」と自己愛の「優越感・有能感」のみが有意な影響を示した。「完全性と理想の追求」は、自己愛の全ての下位尺度に有意な正の影響を示したのに対して、抑うつには有意なパスを持たなかった。「不完全性と失敗への恐れ」は、「優越感・有能感」と「自己主張性」を下げると共に、抑うつを促進することが分かった。また、「優越感・有能感」のみが完全主義の2つの下位概念から有意な正と負の影響を受けて、抑うつを抑制する

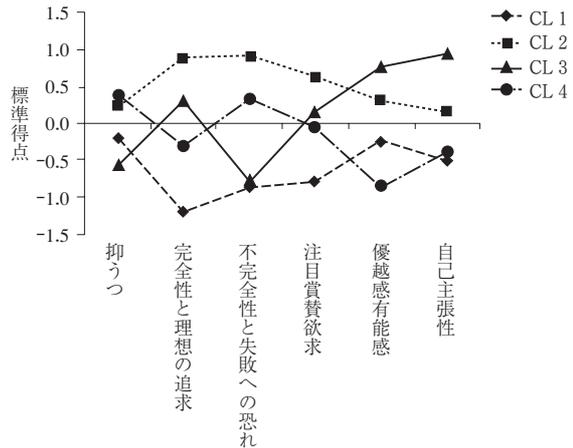


Figure 2 クラスタ分析から得られたプロフィール

ことが分かった。

最後に、完全主義と自己愛の下位尺度を用いてクラスタ分析 (Ward 法・平方ユークリッド距離) を行って、調査協力者を4つのクラスタ (以後 CL) に分類した。標準化した値を用いて、Figure 2 にそのプロフィールを描いた。その際、抑うつ得点も加えた。CL1 (N=52) は、全ての下位尺度得点が平均を下回り、抑うつもやや低かった。CL2 (N=66) は、その逆に全ての下位尺度得点が平均を上回り、抑うつはやや高かった。CL3 (N=49) は、完全主義では「完全性と理想の追求」 > 「不完全性と失敗への恐れ」という関係にあり、自己愛は「注目・賞賛欲求」を除いて顕著に高かった。抑うつは最も低かった。CL4 (N=54) は、完全主義については「完全性と理想の追求」 < 「不完全性と失敗への恐れ」と CL3 と正反対のパターンを示し、自己愛については「注目・賞賛欲求」以外はかなり低くなった。抑うつは4群の中で最も高かった。

Type I エラーを避けるため、抑うつも加えて各下位尺度得点を従属変数とし、CL を要因とした多変量分散分析 (MANOVA) を行った。多変量検定の結果は、全て0.1%水準で有意であり、単変量分散分析 (ANOVA) の結果、全ての従属変数について (抑うつ: $F(3, 217) = 11.358$, 「完全性と理想の追求」: $F(3,$

Table 2 多重比較の結果

CL	抑うつ	完全性と理想の追求	不完全性と失敗への恐れ	注目賞賛欲求	優越感有能感	自己主張性
1	a, b	a	a	a	a	a
2	b, c	b	b	c	b	b
3	a	c	a	b	c	c
4	c	d	c	b	d	a

異なるアルファベットは異なるサブグループ (5%水準)

217)=118.381, 「不完全性と失敗への恐れ」: $F(3, 217)=99.934$, 「注目・賞賛欲求」: $F(3, 217)=29.462$, 「優越感・有能感」: $F(3, 217)=39.536$, 「自己主張性」: $F(3, 217)=31.953$), 0.1%水準でCLの要因の主効果が有意であった。Table 2に多重比較の結果を示した。

考 察

本研究の目的は、完全主義と自己愛が抑うつに及ぼす影響について検討することであった。

新しい完全主義尺度の妥当性

まず、福井・山下(2012)によって再構成された完全主義尺度は、異なる標本集団においても同じ因子構造が再現された。さらに、「完全性と理想の追求」は、単純相関では抑うつと無相関であったのに対して、重回帰分析で「不完全性と失敗への恐れ」の影響を統制したときのみ抑うつを抑制することも福井・山下(2012)と同様の結果であった。そのことから、本尺度が測定上においても内容的にも信頼性と妥当性を兼備していることが示されたと言える。

自己愛と抑うつの関係

続いて、自己愛の各下位尺度と抑うつの関係について、単純相関では「注目・賞賛欲求」とは無相関であったが、「優越感・有能感」や「自己主張性」とは負の相関が見られ、これらの下位尺度のみ抑うつへの抑制効果が見られた。しかしながら、互いに他の影響を統制した重回帰分析においては、「注目・賞賛欲求」は正の、「優越感・有能感」は負の影響を抑うつに対してそれぞれ示し、「自己主張性」は有意な影響を持たなかった。VIFの値も1.20以下と低かったことから、多重共線性の問題によるとは思われない。本研究で使用した自己愛の尺度は、自己愛の健康的な側面を測定していると言われているが、その影響には下位尺度毎にばらつきがあり、「注目・賞賛欲求」はこの中ではどちらかという不適応的な因子である。このことは、中村(2005)が「注目・賞賛欲求」と孤独感の間に正の相関を報告したことも矛盾しない結果であると言える。ただし、この効果は完全主義を統制したときには消失したため、単独で抑うつを促進する要因であると断定することはできない。それに対して、「優越感・有能感」は適応的な側面であると思われ、中村(2005)においても孤独感と負の相関が示されている。この効果は完全主義が投入された後も保存されており、比較

的強い抑うつへの抑制効果を持っているものと思われる。しかしながら、福井(2007)は、自己愛の各下位側面と自尊感情との関連を検討した結果、自己愛の全ての下位尺度と自尊感情の間に負の相関を確認している。自尊感情は抑うつと高い負の相関を持つなど精神的健康の主要な側面に該当することから、本研究の結果とは矛盾していると言える。福井(2007)は、知的な水準により自己愛の精神的健康への効果が反転する可能性を示唆しており、これについては今後の検討が必要である。

完全主義と自己愛の関係

続いて、完全主義と自己愛の各下位尺度間の関連について検討する。「完全性と理想の追求」が自己愛の全ての下位尺度と正の相関を示したのに対して、「不完全性と失敗への恐れ」は「注目・賞賛欲求」のみと正の相関を示し、残りの2つの下位尺度とは負の相関を示した。この結果は、仮説を支持するものであると言える。「完全性と理想の追求」が抑うつに負の、「不完全性と失敗への恐れ」が正の影響を持つことを鑑みると、「注目・賞賛欲求」は完全主義の共通成分と関連がありそうであり、残りの2つは抑うつへの効果の方向性から考えると、完全主義の下位側面それぞれの独自要素と関連があると推測できる。つまり、「注目・賞賛欲求」は完全主義の共通成分との関連があるため抑うつとは無相関となり、「優越感・有能感」は自己愛のより適応的な側面であり、適応的な完全主義がそうであるのと同様に抑うつを抑制するのであろう。

完全主義が自己愛を介して抑うつに及ぼす影響

共分散構造分析の結果からも、「完全性と理想の追求」は自己愛のどの側面にも正の影響を示したのに対して、「不完全性と失敗への恐れ」は「優越感・有能感」と「自己主張性」を抑制し、「注目・賞賛欲求」には影響しなかった。また、重回帰分析では保存されていた「完全性と理想の追求」から抑うつへのパスは消失し、「不完全性と失敗への恐れ」からのパスは保存され、強く抑うつを促進することが分かった。また、自己愛については「優越感・有能感」からのみ抑うつを抑制するパスが残り、他の2つの下位尺度からの有意な影響は見られなかった。このことから、完全性の両側面が自己愛と密接な関連を持ちながら、抑うつを促進することが分かった。特に「不完全性と失敗への恐れ」が「優越感・有能感」を下げ、さらに抑うつ

を促進するという媒介モデルが見出された。「完全性と理想の追求」は、モデル全体では抑うつへの緩和因子とならなかった。また、「優越感・有能感」単独での抑制効果もかなり低いことが分かった。

続いて、完全主義と自己愛のどちらが媒介変数になるのかを検討した結果、データの適合度からは完全主義が独立変数で自己愛傾向が媒介変数となるモデルの方に軍配が上がった。完全主義が先行することについて、近年、行動遺伝学の立場から興味深い知見が得られている。Tozzi, Aggen, Neale, Anderson, Mazzeo, Neale, & Bulik (2004) は、1022組の女性の双子を対象に、自己志向的完全主義の下位尺度のうち、高目標設置と失敗懸念が共通する遺伝的効果を持っていることを示した。さらに、Moser, Slane, Burt, & Klump (2012) は、292組の双子を対象とした研究において、完全主義と不安を測定した結果、二卵性双生児よりも一卵性双生児の方が一致度が高いことを報告した。このことは、育てられた環境よりも遺伝の影響の方が強いことを示唆しており、本研究で得られたモデルの妥当性を補強するのに寄与するかもしれない。また、摂食障害における痩せへの理想化を検討した研究 (Suisman, O'Connor, Sperry, Thompson, Keel, Burt, Neale, Boker, Sisk, & Klump, 2012) からも、間接的にはあるが同様の知見が得られており、完全主義の遺伝的な規定性が従来考えられていたよりも大きいことが示唆されている。本研究は、一般的な青年アナログ群を用いた調査研究であり、双子を対象としたものとは異なる研究デザインを採用しているものの、やはり完全主義の先行性を示し得たという意味で意義深いものであると思われる。ただし、前述した先行研究からは、双子が共有する養育環境よりも共有しない環境の方が影響力が強いことも分かっており、本研究のようなデザインにおいても同様の傾向が得られるかを検討する必要があるだろう。

サブタイプの抽出

しかしながら、ここまでの検討においては、変数間の線形的関係のみを意識しており、精神医学的・臨床心理学的観点からは十分であるとは言えない。というのも、昨今ではいくつかのサブタイプを特定して、臨床実践に役立てるといったサブタイプ論や症状別アプローチ (Persons, 1986) といった観点が求められているからである。こうした目的のためには、独立変数間の交互作用を想定した分析が必要となるが、それでも線形的関係に依るといふ問題がある。そのため、本研究

では非線形的なクラスタ分析を用いてサブグループの抽出を試みた。その結果、4つのサブグループが抽出され、非常に特徴的なパターンが示された。ここからは、線型モデルとは矛盾する結果も出てくるが、臨床的には極めて重要な示唆を含んでいると思われる。

CL1 は、完全主義のどちらの要素も最も低く、自己愛も「優越感・有能感」を除いて最も低い群であり、抑うつは平均をやや下回る程度であったため、「非完全主義」群と名付けた。CL2 は、完全主義のどちらの要素も最も高く、自己愛は「注目・賞賛欲求」が最も高く、それ以外は2番目に高かったため、「過剰完全主義群」と名付けた。CL3 は、適応的な完全主義のみが高く、「注目・賞賛欲求」は平均的で、それ以外の自己愛の下位側面は最も高かったため、「適応的完全主義」群と名付けた。CL4 は、不適応的な完全主義が高く注目・賞賛欲求は平均的で、それ以外の自己愛は低くなったため、「不適応的完全主義」群と名付けた。

「非完全主義」群は、そもそも完全主義が低いため、強迫的な努力を自らに課すこともなく、抑うつも平均以下であるが、自己愛も低い。青年期において自己愛が高まるのは、ある程度自然なことであると思われるが、それが最小限に抑えられている。そのことが心理的健康と直結しているかどうかは、CL3の方がさらに低い抑うつを示すことから早急には結論づけられない。ただ、そもそも完全主義が低いため、高い目標に向かって強迫的に努力することもなければ、達成による優越感や有能感は抑えられ、注目や賞賛を求める必要もないため積極的に自己主張する必要もないだろう。しかしながら、CL1の中には全てを諦めてしまっているような無気力な群が一部含まれているのかもしれない。大部分の者は自分に高い期待をしていないために、困難な課題達成に向かわずほどほどに生活をすることで、ストレスを避けることができるのかもしれない。清水・海塚 (2004) は、本研究のCL1に相当すると思われる対人恐怖と自己愛が共に低い群について、自己の内面への関心が低いため葛藤経験を生じない可能性について示唆している。また、「注目・賞賛欲求」がかなり低いため、外部からの評価に対する感受性が低いと思われ、これが情緒刺激に対する一定の耐性を生んでいるのかもしれない (清水・川邊・海塚, 2008)。清水・岡村 (2010) においても、完全主義の複数の側面が共に低い群は自己肯定感もほどほどで、自己嫌悪感は低い。いずれにせよ、精神的健康度は高い群であると言える。

「過剰完全主義」群は、完全主義が高すぎて、精神的健康を損なっている群であると言える。自己愛の低位側面の中でも比較的不適応的な「注目・賞賛欲求」が最も高く、それ以外は少し低くなっている。清水・海塚（2004）、清水・川邊・海塚（2008）や清水・岡村（2010）による知見を総合すると、自己愛-対人恐怖のマトリックスでは過敏特性優位型の特徴と一致する。自己肯定感は平均的であるが、自己嫌悪感はやや高く、慢性的な葛藤状態にあるとされ、到達不可能な高い理想像を強迫的に追求して、他者からの肯定的評価に依存・固執するため、強い精神的不健康状態にあると言える。清水・川邊・海塚（2007）は、このタイプの者は自意識過剰状態の中で真の意味での自己を信頼できない苦悩を持つとした。客観的には達成を果たしていながらも、終わりのない葛藤状態にあるため、慢性的な不適応状態に陥りやすい群であると言える。

「適応的完全主義」群は、適応的な完全主義が高く、不適応的なそれが低く、抑うつが最も低い。不健康的な自己愛は中程度であり、「優越感・有能感」や「自己主張性」は最も高い。清水・岡村（2010）では、誇大特性優位型に相当する群であり、自己肯定感が高く、自己嫌悪感が低い。清水・川邊・海塚（2008）は、外向性や精神的健康度が高いことも報告しており、高い適応性（清水・川邊・海塚，2007）やストレス反応の低さと情緒刺激への動じにくさ（清水・川邊・海塚，2008）を持つとされる。一方で、「優越感・有能感」や「自己主張性」の高さから、周囲との協調性を失ったときには他者の軽視や独善性を生じる可能性もある（清水・川邊・海塚，2008）ため、確かに抑うつは低いものの、全ての適応的側面が高いかどうかは本研究からは結論づけられない。誇大型の自己愛が強すぎると、本人はよくても周囲は苦しむだろう。ソーシャル・サポートの不足による長期的な精神的健康への影響が懸念される群であると言える。特に、幸福感の源泉に性差があることが知られており、男性は達成によって幸福感を維持するが、女性は重要な他者との関係に左右されると言う（大坊，2002）。この群の男性の幸福感は高いかもしれないが、女性にとっても同様であるかは今後の更なる検討が必要であろう。

「不適応的完全主義」群は、CL3とは対照的に適応的な完全主義が低くて不適応的なそれが高く、抑うつも最も高い。さらに不健康的な自己愛は中程度であるものの、他の自己愛の側面はかなり低い。清水・岡村（2010）によると、過敏特性優位型に相当する群であり、自己肯定感が異常に低いのに対して自己嫌悪感

最も高い。また、理想化された自己を強迫的に追求するという防衛も弱いため、回避的な行動パターンが推測される（清水・岡村，2010）。さらにこの群は、心理的ストレス反応の中でも抑うつ・不安・無気力が高く、攻撃性は平均的である（清水・川邊・海塚，2008）。清水・海塚（2004）も、この群は時間展望が否定的で、自己効力感を見出せず、自我同一性の拡散状態が想定されるとしている。総じて、否定的な悪循環から抜け出せず、攻撃性が低くて回避性が高いため達成経験をすることもなく、それでいて不完全性や失敗への恐れを抱いて他者の目を気にするため、内的な混乱状態が慢性的に続き、無気力や抑うつを招きやすいと言える。

本研究の限界と課題

本研究では、完全主義と自己愛の関連について一定の知見を提供できたものの、青年期における横断的研究に過ぎないため、真の意味での因果関係を結論づけることはできないし、発達による時系列的な変化については何も言うことができない。縦断研究やコホート研究によって、生涯発達の観点から完全主義と自己愛が精神的健康に及ぼす影響についての時間的・発達の變動について検討する必要がある。

また、本研究は完全主義と自己愛の決定要因や、精神的健康に影響を及ぼす他の要因を含めた包括的なモデル化を行っていない。例えば、完全主義には前述した遺伝的な要因以外にも、養育態度（Flett, Hewitt, Oliver, & McDonald, 2002 参照）の影響があることが知られてきた。その中でも、社会的反応モデルは、虐待などの辛い状況から抜け出すために、子どもが完全主義になるというものである。例えば、Zlotnick, Hohlstein, Shea, Pearlstein, Recupero, & Bidadi (1996) は、摂食障害と性的虐待の関連を検討した際、被虐待経験をもちの方が完全主義傾向が強いことを報告した。さらに、自己愛性人格障害の形成を促す要因としても親の養育態度は重要視されている（例、Kernberg, 1975; Kohut, 1977, Millon, 1981）。実証的な研究の例として、回顧的な手法を用いたものでは Ramsey, Watson, Biderman, & Reeves (1996) や宮下 (1991), Horton, Bleau, & Drwecki (2006), Otaway & Vignoles (2006) が、縦断的手法を用いたものでは Cramer (2010) があり、それらの中には虐待歴（Johnson, Cohen, Brown, Smalies, & Bernstein, 1999）やネグレクト歴（Johnson, Smalies, Cohen, Brown, & Bernstein, 2000）が関与しているとする報告もある。完全主義と自己愛に対して、精神的虐待や身体的虐待など他の

タイプの虐待の影響も含めた包括的な検討を行うことで、遺伝的規定因と養育環境の相互作用についての知見が得られることが期待される。

最後に、本研究の調査協力者は学力レベルが高い水準にある大学生であった。そうした集団では自己愛と自尊感情に正の相関が見られ、自己愛の健康的な側面を捉えていることが想定されるが、福井 (2007) は学力レベルが低い学生を対象とした場合に、両者に負の相関が得られることを報告している。その場合、自己愛の各下位尺度は健康的な側面を測定できていない可能性が生じる。この結果を直ちに学力レベルに帰すことが唯一の説明であるとは思えないが、依然として一つの確認すべき要因として横たわったままである。

ま と め

本研究では、完全主義と自己愛の関連について、またその両者がどのように交絡して抑うつに影響を及ぼしているのかについて、大学生を対象に実証的に検討した。その結果、完全主義と自己愛の各下位側面同士の関連や、抑うつへの寄与についての一定の示唆が得られた。さらに、媒介変数モデルの検討によって、完全主義の遺伝的決定因を一部支持する結果が得られた。また、サブタイプ論の観点から検討することによって、適応的な完全主義と不適応的な完全主義の多寡の組み合わせにより4群が抽出され、それぞれの特徴が記述された。それによると、適応的な完全主義が高くて、不適応的な完全主義も共に高い場合は不適応的となったが、不適応的な完全主義は単独でも非常に強い抑うつの予測因子となることが分かった。また、その組み合わせによって、自己愛の各下位側面も特定のパターンを示し、健康的な側面と不健康的な側面を持つことが示唆された。最後に、本研究の限界と課題について言及した。

引用文献

- American Psychiatric Association (2000). Diagnostic and statistical manual of mental disorders (4th ed., text revision; DSM-IV-TR). Washington, DC: Author. (高橋三郎・大野裕・染矢俊幸 (訳) (2002). DSM -IV -TR 精神疾患の分類と診断の手引. 医学書院.)
- Blatt, S. J. (1995). The destructiveness of perfectionism: Implications for the treatment of depression. *American Psychologist*, **50**, 1003-1020.
- Burns, D. D. (1980). The perfectionist's script for self-defeat. *Psychology Today Nov.* 34-52.
- Carroll, B. J., Feinberg, M., Smouse, P. E., Rawson, S. G., & Greden, J. F. (1981). The Carroll rating scale for depression. I. Development, reliability and validation. *British Journal of Psychiatry*, **138**, 194-200.
- Cramer, P. (2010). Young adult narcissism: A 20 year longitudinal study of the contribution of parenting styles, preschool precursors of narcissism, and denial. *Journal of Research in Personality*, **45**, 19-28.
- 大坊郁夫 (2002). 健康心理学と社会心理学. 現代のエスプリ (健康心理学), **425**, 141-152.
- Enns, M. W., & Cox, B. J. (2002). The nature and assessment of perfectionism: A critical analysis. In Flett, G. L., & Hewitt, P. L. (Eds.) *Perfectionism: Theory, research, and treatment*. Washington, D. C.: American Psychological Association. 33-62.
- Flett, G. L., Hewitt, P. L., Blankenstein, K. R., & Mosher, S. W. (1991). Perfectionism, self-actualization, and personal adjustment. *Journal of Social Behavior and Personality*, **6**, 147-160.
- Flett, G. L., Hewitt, P. L., Oliver, J. L., & McDonald, S. (2002). Perfectionism in children and their parents: A developmental analysis. In Flett, G. L., & Hewitt, P. L. (Eds.) *Perfectionism: Theory, research, and treatment*. Washington, D. C.: American Psychological Association, 89-132.
- Frost, R. O., & Henderson, K. J. (1991). Perfectionism and reactions to athletic competition. *Journal of Sport Exercise Psychology*, **13**, 323-335.
- Frost, R. O., Marten, P. A., Lahart, C., & Rosenblate, R. (1990). The dimensions of perfectionism. *Cognitive Therapy & Research*, **14**, 449-468.
- 福井義一 (2007). 成人愛着スタイルと自己愛・自尊感情の関連. 東海心理臨床研究 (東海学院大学大学院附属心理臨床センター紀要), **3**, 5-12.
- 福井義一 (2009). 高目標設置は本当に適応的か? - 成人愛着スタイルを調整変数として -. 心理学研究, **79**(6), 522-529.
- 福井義一・山下由紀子 (2012). 自己志向的完全主義尺度の因子構造と項目構成の再検討. 甲南大学紀要: 文学部編, **162**, 117-127.
- Gabbard, G. O. (1994). *Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-IV edition*. Washington, DC: American Psychiatric Publishing. (ギャバード, G. O. 館 哲朗 (監訳) (1997). 精神力動的臨床精神医学 その臨床実践 DSM-IV 版臨床篇, II 軸障害. 岩崎学術出版社.)
- Hamachek, D. E. (1978). Psychodynamics of normal and neurotic perfectionism. *Psychology*, **15**, 27-23.
- Hewitt, P. L., & Flett, G. L. (1990). Perfectionism and depression: A multidimensional analysis. *Journal of Social Behavior & Personality*, **5**, 423-438.
- Hewitt, P. L., & Flett, G. L. (1991a). Dimensions of perfectionism in unipolar depression. *Journal of Abnormal Psychology*, **100**, 98-101.
- Hewitt, P. L., & Flett, G. L. (1991b). Perfectionism in the self and social contexts: Conceptualization, assessment,

- and association with psychopathology. *Journal of Personality & Social Psychology*, **60**, 456-470.
- Horton, R. S., Bleau, G., & Drwecki, B. (2006). Parenting narcissus: What are the links between parenting and narcissism? *Journal of Personality*, **74**, 345-376.
- 伊藤 拓・上里一郎 (2002). 完全主義およびネガティブな反すうとうつ状態の関連性—抑うつ脆弱要因としての完全主義についての再検討—. *カウンセリング研究*, **35**(3), 185-197.
- Johnson, J. G., Cohen, P., Brown, J., Smalies, E. M., & Bernstein, D. P. (1999). Childhood maltreatment increases risk for personality disorders during early adulthood. *Archives of General Psychology*, **56**, 600-606.
- Johnson, J. G., Smalies, E. M., Cohen, P., Brown, J., & Bernstein, D. P. (2000). Associations between four types of childhood neglect and personality disorder symptoms during adolescence and early adulthood: Findings of a community-based longitudinal study. *Journal of Personality Disorders*, **14**, 171-187.
- Kernberg, O. F. (1975). *Borderline conditions and pathological narcissism*. New York: Jason Aronson.
- 小堀 修・丹野義彦 (2002). 完全主義が抑うつに及ぼす影響の二面性：構造方程式モデルを用いて。 *性格心理学研究*, **10**, 112-113.
- Kohut, H. (1977). *The restoration of the self*. New York: International Universities Press. (コフォート, H. 本城美恵・山内正美 (共訳) (1995). 自己の修復。みすず書房.)
- 小西瑞穂・大川匡子・橋本 宰 (2006). 自己愛人格傾向尺度 (NPI-35) の作成の試み。 *パーソナリティ研究*, **14**, 214-226.
- 小西瑞穂・山田尚登・佐藤 豪 (2008). 自己愛人格傾向についての素因—ストレスモデルによる検討—. *パーソナリティ研究*, **17**(1), 29-38.
- Millon, T. (1981). *Disorder of personality. DSM-III axis II*. New York: John Wiley & Sons.
- 宮下一博 (1991). 青年におけるナルシズム (自己愛) 的傾向と親の養育態度・家庭の雰囲気との関係。 *教育心理学研究*, **39**, 455-460.
- 宮下一博・上地雄一郎 (1985). 青年期における自己愛 (自己愛) 的傾向に関する実証的研究 (1)。 *総合保健科学*, **1**, 51-61.
- 森田正馬 (1953). 赤面恐怖の治し方。自揚社。
- Moser, J. S., Slane, J. D., Burt, S. A., & Klump, K. L. (2012). Etiologic relationships between anxiety and dimensions of maladaptive perfectionism in young adult female twins. *Depression and Anxiety*, **29**, 47-53.
- 鍋田恭孝 (2007). 思春期臨床の考え方・すすめ方。金剛出版。
- 中村 晃 (2005). 不適応的な自己愛と対人関係の関連。 *大阪大学大学院人間科学研究科紀要*, **31**, 197-218.
- 西岡和郎 (1999). 対人恐怖症とパーソナリティ。 *精神科治療学*, **14**, 753-759.
- 大石史博・福田美由紀・篠置昭男 (1987). ナルシズム的人格の基礎的研究 (1) —ナルシズム的人格目録の信頼性と妥当性について—. *日本教育心理学会29回総会発表論文集*, 534-535.
- 大谷保和・明田芳久 (1999). 完全主義と心理的健康の関係—心理的不健康生起モデルを用いて—. *上智大学心理学年報*, **23**, 61-72.
- Otaway, L. J., & Vignoles, V. L. (2006). Narcissism and childhood recollections: A quantitative test of psychoanalytic predictions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **32**, 104-116.
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連。 *教育心理学研究*, **46**, 280-290.
- Persons, J. B. (1986). The advantages of studying psychological phenomena rather than psychiatric diagnosis. *American Psychologist*, **41**, 1252-1260.
- Ramsey, A., Watson, P. J., Biderman, M. D., & Reeves, A. L. (1996). Self-reported narcissism and perceived parental permissiveness and authoritarianism. *Journal of Genetic Psychology*, **157**, 227-238.
- Raskin, R., & Hall, C. S. (1979). A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.
- Raskin, R., & Terry, H. (1988). A principal-components analysis of the narcissistic personality inventory and further evidence of its construct validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 890-902.
- 佐方哲彦 (1986). 自己愛人格の心理測定—自己愛人格目録 (NPI) の開発—. *和歌山県立医科大学進学課程紀要*, **19**, 63-76.
- 桜井茂男・大谷佳子 (1997). “自己に求める完全主義” と抑うつ傾向および絶望感との関係。 *心理学研究*, **68**, 179-186.
- Shafran, R., Cooper, Z., & Fairburn, C. (2002). Perfectionism: Towards a redefinition and cognitive-behavioral model of maintenance. *Behaviour Research and Theory*, **40**, 773-791.
- 島 悟・鹿野達男・北村俊則・浅井昌弘 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について。 *精神医学*, **27**(6), 717-723.
- 清水健司・海塚敏郎 (2004). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の基礎的研究。 *広島国際大学心理臨床センター紀要*, **3**, 23-32.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2007). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の相互関係について。 *心理学研究*, **78**, 9-16.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2008). 対人恐怖心性—自己愛傾向2次元モデルにおける性格特性と精神的健康の関連。 *パーソナリティ研究*, **16**(3), 350-362.
- 清水健司・岡村寿代 (2010). 対人恐怖心性—自己愛傾向2次元モデルにおける認知特性の検討—対人恐怖と社会恐怖の異同を通して—. *教育心理学研究*, **58**, 23-33.
- Stolorow, R. D. (1975). Toward a functional definition of narcissism. *International Journal of Psychoanalysis*, **56**,

- 179-185.
- Suisman, J. L., O'Connor, S. M., Sperry, S., Thompson, J. K., Keel, P. K., Burt, S. A., Neale, M., Boker, S., Sisk, C., & Klump, K. L. (2012). Genetic and environmental influences on thin-ideal internalization. *International Journal of Eating Disorder*, **45**(8), 942-948.
- Tozzi, F., Aggen, S. H., Neale, B. M., Anderson, C. B., Mazzeo, S. E., Neale, M. C., & Bulik, C. M. (2004). The structure of perfectionism: A twin study. *Behavior Genetics*, **96**, 465-490.
- Trumpeter, N., Watson, P. L., & O'Leary, B. J. (2006). Factors within multidimensional perfectionism scales: Complexity of relationships with self-esteem, narcissism, self-control, and self-criticism. *Personality and Individual Differences*, **41**, 849-860.
- 辻 平治郎 (1992). 完全主義の構造とその測定尺度の作成. 甲南女子大学人間科学年報, **17**, 1-14.
- Watson, P. J., Varnell, S. P., & Morris, R. J. (1999). Self-reported narcissism and perfectionism: An ego-psychological perspective and the continuum hypothesis. *Imagination, Cognition, and Personality*, **19**(1), 59-69.
- 山下由紀子・福井義一 (2011). 完全主義と先延ばしが抑うつに及ぼす影響—日本語版 General Procrastination Scale (GPS) の再検討を含めて—. 甲南大学紀要文学編, **161**, 223-230.
- Zlotnick, C., Hohlstein, L. A., Shea, M. T., Pearlstein, T., Recupero, P., & Bidadi, K. (1996). The relationship between sexual abuse and eating pathology. *International Journal of Eating Disorder*, **20**(2), 129-134.

謝 辞

本研究におけるデータ収集とその整理については、甲南大学文学部人間科学科2012年度4年生ゼミの光田沙姫菜さん、河合穂乃さん、深松隼人くんの多大なご協力を得ました。心より感謝を申し上げます。